

2012年度国立音楽大学音楽研究専修 研究発表会

Musicking

12/14/Fri 16:30~
6号館110スタジオ

きこく
立
音
す
る
音
楽

●図書館テーマ展示●

期間：2012年11月13日～12月22日

展示場所：図書館ブラウジングルーム

きく音楽、する音楽 ~ Musicking ~

2012年度国立音楽大学音楽研究専修 研究発表会専門ゼミ

研究発表会

日時：2012年12月14日(金) 16時30分より

場所：6号館110スタジオにて

-目次-

はじめに	2
展示資料	2

はじめに

あなたにとっての音楽とは、なんですか…？

きっとたくさんの答えが返ってくると思います。人それぞれ答えが異なるように、時代や場所によって音楽の在り方もそれぞれ違います。人類が誕生し、音楽はどのように誕生したのでしょうか。そして音楽と人々はどう関わってきたのでしょうか。

今回私たち、音楽研究専修ゼミ一同は、そのような疑問を基に「音楽の起源」から「現代の音楽」に至るテーマを掲げ、考えを深めてきました。その際に私たちが参考にさせていただいた、図書や図版、録音等の資料をご紹介します。

展示に合わせて、研究発表会も行います。12月14日(金)16:30～18:00より、場所は6号館110スタジオとなります。音楽に関わる全ての方に聞いていただきたい！そんな想いを持ち発表するので、お気軽にお越し下さい！当日は目や耳で楽しみ感じることでできる企画も予定しております。

展示資料

《パネル》

無題

これは1753年にチューリヒで行われた演奏会の模様である。そこには演奏中にも関わらず、会話に熱中している人々が描かれている。また、左端には食べ物や飲み物を配る姿も描かれており、当時のコンサートと現在のコンサートのあり方の違いを見ることができる。

出典：『人間と音楽の歴史』第4シリーズ、1600年から現代まで；第2巻

/ ハインリヒ・W・シュヴァープ著。 - 音楽之友社, 1986. p. 57. (請求記号 C18-167)

musicking

現代におけるクラシック音楽のコンサートは、作曲家から演奏家、そして聴衆へと伝えられる一方向のコミュニケーションとしての音楽が前提とされている。

出典：『ミュージッキング 音楽は 行為 である』 / クリストファー・スモール著。 - 水声社, 2011. (請求記号 J121-267)

機能偏在

人間の脳は左右でそれぞれ違う機能を営んでいる。左脳は言語による象徴、分析、継時的な機能に関わり、右脳は言語によらない空間、全体、同時的な機能を担っているとされている。

出典：『よくわかる！脳とこころの図解百科』 / 厚東篤生・濱田秀伯著。 - 小学館, 2008. p. 51.

(請求記号 J114-394)

脳の進化

脳の進化は「大型化」の歴史である。その働きを落とすことなく再編成しながら大きくなっていくため、つくりなおすのではなく、新たな部位をうまくつけ加えるリフォーム（増改築）という方法がとられた。

出典：『よくわかる！脳とこころの図解百科』 / 厚東篤生・濱田秀伯著。 - 小学館, 2008. p. 28.

(請求記号 J114-394)

無題

1952年9月30日、日比谷公会堂にてアルフレッド・コルトーによる演奏の様子。彼の有名なルパート、自由なリズムの取り方は、ロマン派気質に貴族的な古典主義の要素が組み合わさっていて、惹かれるものがある。

出典：『アルフレッド・コルトー ピアノ演奏解釈』 / ジャンヌ・ティエフリー編。 - ムジカノーヴァ, 1983. (請求記号 C37-132)

無題

「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」

ジェームズ,W.より

何かに対する人間の身体反応は、感情が芽生えたことによって起こるものではない。何かしらの感覚が脳に入力され時、その感覚情報は骨格筋や内臓に送られ、泣く・笑うといった反応が起こる。その後、“悲しい・嬉しい”といった感情が湧くのだ。音楽による身体反応も同じで、身体が反応した後に感情が湧きあがる。

出典：『情動と音楽』/國安愛子. - 音楽之友社, 2005. p. 11. (請求記号 J106-434)

ロックとメディア社会年表

今回、ポピュラー音楽を扱う上で背景となるメディアの発展。この年表ではメディアの歴史が日本、世界の音楽動向と共に一目で分かるようになっている。研究にあたってこれが大きな主軸となるためしっかりおさえておきたい。

出典：『ロックとメディア社会』/サエキけんぞう著. - 新泉社, 2011. p. 322-327. (請求記号 J121-566)

《図書》

“音楽の起源とは・・・？”

『歌うネアンデルタール 音楽と言語から見るヒトの進化』 請求記号 J108-730

スティーヴン・ミズン著 熊谷淳子訳 早川書房 2006年

人類は何故これほどまでに音楽を好むのだろうか。従来の進化史は、音楽を無視し、常に言語の発達と共に語られてきた。しかし近年、研究者たちは無視できない状況に直面した。果たして、音楽が人類の進化に与えた影響とは...？ヒトと音楽との関係の謎に迫る画期的な一冊。

『音楽する精神 人はなぜ音楽を聴くのか？』 請求記号 C59-212

アンソニー・ストー著 佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳 白揚社、1994年

どうして私たちは音楽を聴くのだろうか。音楽とは私たちの生活においてどのようなものだろうか。この本では、音楽の起源から脳や身体との関わり、私たちが言葉にできない音楽への思いを、心理学の立場から探っている。

“音楽と脳の関係とは・・・？”

『右脳と左脳～脳センサーでさぐる意識下の世界』 請求記号 J86-818

角田忠信著 小学館ライブラリー 1992年

人間の脳は、言葉と音を聞き分ける左脳と右脳に分かれているが、その働きは、言語や民族の違いによって異なると言われている。この本では、脳研究の権威が、そのような脳機能の神秘的な働きを分かりやすく解説している。

『音楽する脳』 請求記号 J107-206

ウィリアム・ベンゾン著 西田未緒子訳 角川書店 2005年

なぜ人は音楽に感動したり興奮するのか。この本を読めば、その答えを見出だすことができるだろう。自らも音楽家である認知科学者が、様々な実例を歴史と科学、両方の見地から分析。音楽成立の壮大な謎に迫る。

『ピアニストの脳を科学する 超絶技巧のメカニズム』 請求記号 J121-775

古屋晋一著 春秋社 2012年

音楽する脳と身体の不思議な関係を、脳科学・身体運動学からひもといていく本。ピアニストに必要な身体能力、記憶力、情報処理力をメカニズムすることで、より演奏への理解を深めることができる。

『音楽と人間と宇宙～世界の共鳴を科学する』 請求記号 J122-871

エレナ・マネス著 ヤマハミュージックメディア 2012年

音楽科学とは今現在私たちのまわりで起きている冒険の一つであり、私たちの想像力、精神状態、生理機能に非常に強い影響を与えている。この芸術に対する理解は、日々深まっているが人間は、音楽が原始的な力を持っていることを、本能的に知っているのである。

“音楽における情動とは・・・？”

『情動と音楽』 請求記号 J106-434

國安愛子著 音楽之友社 2005年

どのようにして、音楽による身体反応は起こるのだろうか。このメカニズムには、“情動”というキーワードが深く関係している。本書では、そんな情動と音楽との関わりの研究結果から、音楽による身体反応について追究することができる。

『音楽行動の心理学』 請求記号 J55-590

ルードルフ・E.ラドシー、J.デーヴィッド・ポイル共著 音楽之友社 1985年

音楽を聞いて、ウキウキしたり、自然と身体が動いたりするのは何故だろう。そんな疑問を抱いたことはないだろうか。音楽による気分の変化や身体反応について、“情動”をキーワードにまとめられている。

“音楽に関わる人々の変化とは・・・？”

『新編 音楽家の社会史』 請求記号 J116-071

西原稔著 音楽之友社 2009年

主に19世紀の西洋音楽における音楽家の活動について、当時、音楽家がおかれていた状況や聴衆との関係が書かれている。社会の変化と共に音楽がどのようにして18世紀から大きな変容を遂げたのか、図版や手紙などの引用をしながらひも解いた著作。

『聴衆の誕生 ポスト・モダン時代の音楽文化』 請求記号 C46-729,C46-730,C46-731

渡辺裕著 春秋社 1989年

18世紀から現代もしくは近い未来まで、時代を追って変遷していく西洋の音楽スタイルによる、聴取の「質」の変化を社会的、あるいは商業的な背景から読み取っている。思想や社会的視点のみならず、自動演奏のピアノや生活音を用いた音楽など、科学技術の進歩によって生じた音楽への影響についても言及している。現代の音楽界における聴取のあり方を知りたい方に。

『クラシック音楽は、なぜ鑑賞されるのか：近代日本と西洋芸術の受容』

請求記号 J120-886

西島千尋著 新曜社 2010年

鑑賞とは、近代において芸術の導入に伴い生じた日本独自の概念だ。著者は、クラシック音楽が日本でいかにして「きくべき対象・わかるべき対象」となったのか、鑑賞の概念の変遷を通じて紹介している。

“演奏者が心掛けるべきこととは・・・？”

『楽譜を読むチカラ』 請求記号 J121-377

ゲルハルト・マンテル著 久保田慶一訳 音楽之友社 2011年

「まずは自分自身が成長するために、そして次に自分が感じた音楽を聴衆に伝えるために、何をしなくてはならないのか」というテーマの下で、実際の譜例と共に分かりやすく解説がされている。演奏者であれば一度は悩むようなことを解決できるヒントが見つかるかも知れない。

“Musicking とは…?”

『ミュージッキング 音楽は 行為 である』 請求記号 J121-267

クリストファー・スモール著 野澤豊一・西島千尋訳 水声社 2011 年

現在われわれが使っている「音楽」すなわち「music」は、西洋的・近代的な概念である。著者はその概念の限界を示し、より本来的な概念「活動および行為としての音楽」すなわち著者自身の造語「musicking」に主張を込めた。

“音楽とメディアの関わりとは…?”

『ネットワーク・ミュージッキング「参照の時代」の音楽文化』 請求記号 J116-344

井手口彰典著 勁草書房 2009 年

今日私たちが生活を送る上で欠かすことのできない存在となっているインターネット。技術の発達に伴って音楽の聴き方、在り方が変化しているのは間違いない。その様相を「ネットワーク・ミュージッキング」という概念を用いて多角的な視点から分析、考察をしている。

『考える耳 再論 音楽は社会を映す』 請求記号 J119-154

渡辺裕著 春秋社 2011 年

毎日新聞の夕刊文化欄に書かれてきた「考える耳」音楽時評コラムを 30 回分まとめたこの本。1800 字前後で一つの話が完結しており読み易い。今回の研究では「著作権問題の一人歩き」「複合的なモノとしてのレコード」の話に重きを置いた。丁寧な文章で知識が充分なくともしっかりと理解でき読み進むことができるのが魅力の一冊。

『ロックとメディア社会』 請求記号 J121-566

サエキけんぞう著 新泉社 2011 年

時代に伴い進化してゆくメディア。そんなメディアをロックの歩みとともに追っている。中でもインターネットの存在は日本の音楽社会にどのような影響をもたらしたのか。そこには現代に見られるアイドル文化に深く関係しているのであった。

『同人音楽とその周辺 新世紀の振源をめぐる技術・制度・概念』 請求記号 J122-121

井手口彰典著 青弓社 2012 年

今回の研究では第 5 章の、「現代的想像力と「声のキャラ」 『初音ミク』について」を取り上げる。あらゆるメディアが発展を遂げてきた今、VOCALOID 『初音ミク』の注目度は高い。何故これまでも注目されているのだろうか。声として「キャラ」化したことを踏まえて、ユーザーと「彼女」の関係性を分析している。

『DTM MAGAZINE』 請求記号 P1814 14(11)

2007 年 11 月号 寺島情報企画発行

ヤマハが開発した「VOCALOID」のキャラクターボーカルシリーズの第 1 弾として登場した「初音ミク」。メロディと歌詞を打ち込むだけの簡単な操作で、サンプリングされた声をもとに自由自在に歌ってくれるのが特徴。ヴァーチャルアイドルとして、世界中から注目を集めている。

『未来型サバイバル音楽論: USTREAM、twitter は何を変えたのか-』 請求記号 J119-407

津田大介、牧村憲一共著 中央公論新社 2010 年

CD が売れない音楽業界、ライブ・フェスの盛況、双方向のコミュニケーションで生まれる音楽など、著者二人が多岐にわたり徹底討論。アーティストが自由に発信できる時代の音楽のあり方について、考えさせられる一冊。

『AKB48 がヒットした 5 つの秘密』 請求記号 J121-391

村山涼一著 角川書店 2011 年

国民的アイドルに成長した AKB48。AKB48 には功名かつ緻密なマーケティングが展開されている。

彼女たちがブレイクした理由を、マーケティング戦略から、5つの視点で探った一冊。

“音楽にはこんなにも分野があるのです”

『音楽の宇宙 - 皆川達夫先生古希記念論文集』 請求記号 C62-583

皆川達夫先生古希記念論文集編集委員会編 音楽之友社 1998年

古代・中世・ルネサンス・バロック・古典派・ロマン派・現代の音楽、キリシタン音楽、洋楽受容、民族音楽、音楽社会学、音楽教育学、美学、歴史学、美術史といった多彩な分野の論文が、様々な視点から取り上げられている。全50編を収録しているが、読みやすいものが多く、驚沢な一冊となっている。タイトルを見て興味のあるものを読むだけでも、音楽に対する理解が深まることだろう。

《楽譜》

“Valses” 請求記号 G3-992

Chopin

Alfred Cortot

Paris : Editions Salabert, c1938年

コルトーによる校訂楽譜である。曲の冒頭に演奏時間の目安が示されており、曲中には多くの注釈が添えられている。ぜひ、コルトーの演奏が録音されたものと見比べながら聴いてみたい。

《録音・映像》

“Waltzes Ballades” 請求記号 XD18819, XD18820, XD18821

Chopin

[Tokyo] : EMI, 1992年

ここに収録されたワルツは、1934年6月19日～20日のコルトーによる演奏である。実際にコルトーの演奏を聴いて比べてみることで彼独自の解釈を発見できる。また、楽譜に「書かれたもの」と「書かれないもの」がなぜ存在するのか考えさせられることだろう。

“Cinéma : entr'acte de “Relâche” ; Sonnerie pour réveiller le roi des singes ; Musique d'ameublement ; Vexations” 請求記号 XD5950

Erik Satie

Tokyo : Erato, 1987年 (1980年録音)

このCDに収録されている《家具の音楽》は短いモチーフを繰り返して音楽の表現性を消すなどして、BGMのように聞くことを要求した作品である。これにより、19世紀に急速に進んだ音楽の集中的な聴取、いわゆる「鑑賞するための音楽」から新しい聴き方へと移行させることを意図して作られたことがはっきりと表れている。

“The Art of Piano” 請求記号 VE222

ワーナー・ヴィジョン・ジャパン c1999年

20世紀を代表する偉大なピアニストたちの貴重な演奏や、インタビュー映像が収録されている。ピアニストたちの独自の世界観や特徴をこの一枚で、多く垣間見ることができる。歴史を越えて私たちが魅了してくれることは間違いない。

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>